

スラッシュ・リーディングについて

松 山 晋

0 はじめに

読解の授業では学生の発表が中心になる。ところが、指名した学生からは「単語は調べたが文の意味がわからない」という答えが返ってくることが多い。¹⁾この発言を文字通り解釈すると、「語彙は大丈夫だが文法がわからない」となるだろう。また、単語・表現の意味は文脈に左右されるという事実を勘案すると、「語彙、文法、文脈(のどれか、または全部)がわからない・つかめない」、とも解釈できる。更に同じことを言語学的に解釈すれば、「形態論(morphology)、統語論(syntax)、そして語用論(pragmatics)のいずれか(または全て)のレベルで困難を感じている」となる。²⁾いずれにせよ、この状態では読解を主体とした授業運営が困難である。

こうした状況を打開するため、本稿では特に読解の基礎となる文法(形態論・統語論)レベルの能力向上を目指した読解指導を扱う。³⁾指導の中心になるのは、スラッシュ・リーディングである。

0.1 スラッシュ・リーディング

スラッシュ・リーディング(以下、SR)は「フレーズ・リーディング(phrase reading)」、「チャンク・リーディング(chunk reading)」とも呼ばれ、本来は同時通訳者の訓練用に開発されたことが知られている。SRの特長として次の三つが挙げられる。

第一の特長は、読解効率の良さにある。英文をそのままの語順で読むので、従来の訳読方式

のように後ろから前に戻る手間がほとんど不要である。⁴⁾

第二の特長は、意味の固まりごとに切って解釈することであり、この作業は文を正確に理解する精読の作業と相性が良い。また、文を切る作業を通じて、読者は長文がもともとは短文(または意味の固まり)の集合であることを確認することができ、それが長文恐怖症を軽減・克服するきっかけになることも期待できる。

第三の特長は、文・節よりも小さい単位を読み進むので、集中力が持続しやすいことである。もちろん、集中が続くことは読解速度、そして理解度の向上につながる。

0.2 SRと精読

実にさまざまな読解方法が存在するが、本稿は主題を読解(精読)の授業へのSRの導入—特にその技術面—に限定して話を進める。⁵⁾

言語学では、1970年頃から分析の基本単位が文・節からテキスト(文脈、ディスコース)に代わった(Givón 1979 : xiii, Leech 1983 : 1-7)。英語教育もこの影響を強く受けており(Olshtain & Celce-Murcia 2001 : 708)、文(要素)を分析の基本単位とする精読指導は、前時代的な英語教育の方法であるという批判もあるだろう。しかし「テキスト」が通例複数の「文」で構成されている以上、「正確な読解」における文(または節)単位の読解の重要性が揺らぐことはないとは私は考える。また、テキスト全体の「大まかな理解」を過度に強調する現代の風潮は、日本語の文章と比べてより緻密な構成を持つことが多い英文の読解という行為自体

を軽視することにつながるという危惧の念さえ抱く。⁶⁾ こうした点を考えると、現代に至って一字一句もゆるがせにしない精読の重要性がさらに高まっていると考えることもできるのではないだろうか。

0.3 授業への導入手順

Hoey (2001: 43) によると、読解とは「読み手と書き手がステップを合わせて踊ること」である。このダンスがうまく行くかどうかは、読み手が書き手のステップについていくことができるかどうかにかかっている。ダンスの前に準備運動が必要なように、SR の前にも準備段階が不可欠である。

1 SRの準備段階

SR は意味の固まりを基本単位とした読解方法である。したがって、その導入にあたっては、単語・表現の理解以外に、基礎文法（特に品詞・文要素・5文型）の習得が重要な前提条件となる。⁷⁾

1.1 基礎文法の確認

安藤 (1989: 1-28) は最初の3章に基礎文法を簡潔にまとめてあり便利である。以下、この本の記述を援用しながら確認・指導すべき項目を列挙する。⁸⁾

1.1.1 文の構造 (安藤 1989: 1-11)

確認すべき項目:

- (1) 文の構成: 主部と述部
- (2) 文の要素: S/V/O/C + M (修飾語句)
- (3) 5文型: 「英語の文の大部分は…5文型にせじつめることができる。英文を正しく解釈するためには、5文型の知識が確実に身につけていなければならない。」(安藤 1989: 4)

1.1.2 品詞・句・節

(安藤 1989: 12-19)

確認すべき項目:

- (1) 8品詞: 名詞、代名詞、形容詞、動詞、副詞、接続詞、前置詞、間投詞⁹⁾
- (2) 句: 名詞句、形容詞句、副詞句

(3) 節: 名詞節、形容詞節、副詞節

(4) 単文、重文、複文

1.1.3 文の種類 (安藤 1989: 20-28)

確認すべき項目:

- (1) 文の4種類: 平叙文、疑問文、命令文、感嘆文
- (2) 否定文の作り方
- (3) 疑問文の作り方

1.1.4 その他

英文の書き方の特長を知ることにより効率的な読解が可能になる。以下、数例を挙げる。

- (1) 書き手は同じ表現を避ける傾向があり、少々意味がずれても他の表現を使う (A ⇒ A' ⇒ A'' ⇒ A''' …)。この仕組みが分かれば辞書を引く回数を大幅に減らすことができる。¹⁰⁾
- (2) 理解度を高めるため、書き手は同格表現 (言い換え; A = B) を使う。“A, namely B” のように言い換えを明記する副詞等を使うのが原則だが、実際には“A, B” のように単に並んでいるだけの場合も多いので慣れが必要。
- (3) パラグラフの構成・特長 (cf. Longacre 1979)。
- (4) ジャンルによる文体の違い (例: 新聞記事の書き方)。

2 SRの導入

スラッシュが入る代表的な位置としては次の6箇所がある。提示の際には、これらがあくまで原則であり、例外が多いことにも言及する必要がある。

- (1) 句読点 (, . : ; -) の前。
- (2) 接続詞の前 (節を導く疑問詞、that 等を含む)。
- (3) 前置詞の前 (to 不定詞を含む)。
- (4) 主語と動詞 (SV) の後。ただし、主語が長い場合は動詞の前で切る (S/V)。
- (5) 関係詞 (that, which, what, where, who, how 等) の前。

(6) 過去分詞、動名詞 (-ing) の前。

実際の英文にスラッシュを入れると次のようになる。

Two new studies / of the elusive dormouse / have revealed / that it has disappeared / from several counties in England. Malcolm Smith reports / on why its geographical range is shrinking.

Lewis Carroll could not have been more accurate. In *Alice's Adventures in Wonderland* / he wrote : 'There was a table set out / under a tree / in front of the house, / and the March Hare and the Hatter were having tea / at it. A dormouse was sitting / between them, / fast asleep, / and the other two were using it / as a cushion, / resting their elbows / on it, / and talking / over its head. "Very uncomfortable / for the dormouse," / thought Alice, / "only as it's asleep, / I suppose / it doesn't mind."' (*The Independent on Sunday*, 23 March 1997, p. 50 ; Hoey (2001 : 36) から引用)

2. 1 SR の注意点

SR の目的は正確な内容把握であり、正確な和訳を得ることではない。それ以外にも注意すべき点がある。

- (1) スラッシュを引く度に内容把握を試みる。ただし「二度読み」、「戻り読み」は禁止しない (Leeuw 1965 : 82 ; cf. 瀧澤 2002 : 67)。
- (2) 慣れてきたらスラッシュを書き入れず頭の中だけで切るようにする。
- (3) 教材の作成に当たっては、複雑な文構造を徐々に提示する形式が望ましい。その際、統語的 (文法的) 内容が文体的内容に優先すべきである。

2. 2 SR の段階的導入例

以下、5回に分けてSRの段階的導入を行う場合を扱う。

1回目

作業：意味の固まりごとに和訳。各文の主部と述部を判断する。

英文へのスラッシュ：模範解答として既に記入済み。

目標：「スラッシュ訳」 (=不自然な日本語) に慣れる。スラッシュの位置を確認する。

2回目

作業：自分で意味の固まりを判断し和訳。各文の文要素 (S/V/O/C/M) を判断する。

英文へのスラッシュ：学生が記入。各文のスラッシュ数が指定されているのでそれに従う。

目標：スラッシュの位置を復習する。文・節を要素に分解できるようになる。

3回目

作業：自分で意味の固まりを判断し和訳。各文の文要素 (S/V/O/C/M) を判断し、文型を指摘する。

英文へのスラッシュ：学生が記入。各文のスラッシュの概数が指定されているのでそれに従う。自信のある者は意味の固まりを大きくして解釈する。

目標：スラッシュの位置を再度復習する。文・節を要素に分解し、文型が指摘できるようになる。

4回目

作業：自分で意味の固まりを判断し解釈 (和訳を書き込む必要はない)。

英文へのスラッシュ：学生が記入 (位置も各自が判断する)。

目標：正確な読解。可能であれば読解速度の向上。

5回目

作業：自分で意味の固まりを判断し解釈 (和訳を書き込む必要はない)。

英文へのスラッシュ：学生が判断 (書き込みをせず、頭の中だけで切る)。

目標：正確な読解。読解速度の向上。

3 まとめ

本稿では、SR 導入にあたっての準備段階と SR の段階的な導入方法を扱った。要旨をまとめると次のようになる。

- (1) SR は読解（精読）の基礎力養成に効果的である。
- (2) SR には基礎文法（特に品詞、文要素、5 文型）の理解が不可欠である。

本稿で扱った読解指導が、Hoey (2001: 31) の言う “language practice” の段階にとどまっていることは事実である。読み手（特に語学学習者）はこの段階にとどまらず、文の流れを推測しながら読み進むべきだという彼の主張 (Hoey 2001: 31) には私も賛成であり、今後は他の読解方法（パラグラフ・リーディング、スキミング、スキミング等）と SR を組み合わせることでより効率のよい読解指導ができることを目指す所存である。

注

- 1) 後ろから前に戻る読み方（「戻り読み」）の途中で意味がわからなくなるという答えも多い。
- 2) 形態論には語彙 (lexis)、語用論には談話分析 (discourse analysis) が含まれる。ここでは文体論には言及しない。また、文脈から単語の意味を推測する時、読者自身が持つ一般的知識が必要になる (Olshtain & Celce-Murcia 2001: 719) が、日本語力の問題とも合わせて本稿では扱わない。
- 3) 本稿では「読解」＝「精読」として論を進める。語学の四技能の中で読解に焦点を当てたのは、授業運営の都合以外にも理由がある。それは、読解指導は他の三技能（書く、聞く、話す）に比べて教育効果が高い点である。特に大学一年生の段階で読解技術を習得しておくことは、専門書の読解に役立つのみならず一生役に立つ技術を得ることを意味する。
- 4) この為、SR は速読の基本にも位置づけられる (森田・吉田 1985: 27) が、本稿では SR を正確な内容把握の基礎と位置づけて論を進める。「同時通訳方式」(＝SR) は上級者向けの読解技術であり初心者には向かないとする考え (國弘 1999: 43-45) もあるが、國弘自身 (1999: 45) も SR は意味の理解には有効な読

解方法であることを認めている。また、「戻り読み」、「二度読み」については以下を参照。

- 5) 具体的な教材の提示は別の機会に譲る。練習問題の作成の参考になる本として、安藤 (1989), Burton-Roberts (1986), 江川 (1991), Goldman and Szymanski (1993), Hudson (1994), 森田・吉田 (1985), 米山 (2005) を挙げておく。
- 6) 川島 (2000: 24-25) を参照
- 7) 準備段階に目の訓練を取り入れる本 (森田・吉田 (1985: 29-38) の「たて読み」、「横読み」など、速読の本に多い) もあるが、私は Leeuw (1965: 82-83) と同じ立場を取る。つまり、読書は柔軟な作業であることを念頭に置き効率的な読解に努めることで十分であり、目の訓練 (eye-swing) は不要である。
- 8) 大学の授業で基礎文法を扱うことに対して、学生から不満が出ることは十分予想できる。そこで、準備段階の導入にあたっては、この作業が SR の基礎となること、そして中学・高校の基礎文法を復習・確認する良い機会であることを強調することが必要となろう。加えて、「基礎」文法についての「応用」的な話題を盛り込み、英語力に自信を持つ学生を飽きさせないような工夫も望まれる。以下数例を挙げる。
 - (1) 英国の英語学者 C. T. Onions の1904年の著作 *An Advanced English Syntax* が、5 文型のルーツになったと言われている (江川 1991: 186)。
 - (2) there 構文 (There is/are ...) は第 1 文型と考えることができる。文頭の there は存在を表わす副詞であり、その後動詞・主語が続く。この際、主語 (名詞) には通例新情報が含まれる。(したがって、*‘There is the book on the table’ とは言えない。ただし、‘Who’s coming to the party? - There’ll be Angus, Jeremy, and Kelly’ のように人・物を列挙する場合はある種の旧情報 (=相手にとっての新情報) を伴うことができる。) また、文頭の there を主語として分析する方法もある。
 - (3) 「日本の高校生にとって最も理解しにくい文型は、<C>を含む文型、特に<SVOC>である」と安藤 (1989: 4) にあるが、同じことはもちろん大学生にも当てはまる。第 2 文型と第 5 文型は共通点が多い。そのため、第 5 文型の理解に困難を感じる場合は、第 2 文型の復習が必要になる (cf. 江川 1991:

192-193)。

- 9) 伝統文法の品詞分類については判別の基準が明確でない等の批判もある (Huddleston 1984 : 90-99, Lyons 1968 : 317-319) が、この問題はここでは扱わない。
- 10) あるスポーツ記事で使われた「勝つ、負かす」を意味する表現を登場順に拾うと次のようになる : win ⇒ defend one's title ⇒ score a victory ⇒ defeat ⇒ dispose of ⇒ hammer ⇒ oust ⇒ flatten.

参考文献

- Aarts, Bas, David Denison, Evelien Keizer & Gergana Popova, eds. (2004) *Fuzzy Grammar: A Reader*. Oxford : Oxford University Press.
- 安藤貞雄 (1989) 『はじめてわかる英文法』東京 : 英潮社。
- Bolinger, Dwight. (1979) 'Pronouns in Discourse.' Givón (ed.) (1979) : 289-309.
- Burton-Roberts, Noel. (1986) *Analyzing Sentences: An Introduction to English Syntax*. London & New York : Longman.
- Crystal, David. (2004) 'English Word Classes.' Aarts *et al.* (eds.) (2004) : 191-211. First published in 1967, in *Lingua* 17 : 24-56.
- Dijk, Teun A. van, ed. (1985) *Handbook of Discourse Analysis, Volume 2: Dimensions of Discourse*. London : Academic Press.
- 江川泰一郎 (1991) 『英文法解説 - 改訂三版 -』東京 : 金子書房。
- Givón, Talmy. (1979) 'Preface.' Givón (ed.) (1979) : xiii-xx.
- Givón, Talmy, ed. (1979) *Syntax and Semantics, Volume 12: Discourse and Syntax*. New York : Academic Press.
- Goldman, Norma & Ladislav Szymanski. (1993) *English Grammar for Students of Latin: The Study Guide for Those Learning Latin*. 2nd ed. Ann Arbor, Michigan : The Olivia and Hill Press.
- Greenbaum, Sidney & Randolph Quirk. (1990) *A Student's Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Halliday, M. A. K. (1985) 'Dimensions of Discourse Analysis: Grammar.' Dijk (ed.) (1985) : 29-56.
- Hoey, Michael. (1983) *On the Surface of Discourse*. London : George Allen & Unwin.
- Hoey, Michael. (2001) *Textual Interaction: An Introduction to Written Discourse Analysis*. London & New York : Routledge.
- Huddleston, Rodney. (1984) *Introduction to the Grammar of English*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Hudson, Mutsuko Endo. (1994) *English Grammar for Students of Japanese: The Study Guide for Those Learning Japanese*. Ann Arbor, Michigan : The Olivia and Hill Press.
- Hudson, Richard. (1992) *Teaching Grammar: A Guide for the National Curriculum*. Oxford : Blackwell.
- 川島幸希 (2000) 『英語教師 夏目漱石』東京 : 新潮社。
- 國弘正雄 (1999) 『英語の話しかた』東京 : ちばな出版。
- Leech, Geoffrey N. (1983) *Principles of Pragmatics*. London & New York : Longman.
- Leeuw, Manya and Eric de. (1965) *Read Better, Read Faster*. Reprinted in 1978. Harmondsworth, Middlesex : Penguin Books.
- Longacre, R. E. (1979) 'The Paragraph as a Grammatical Unit.' Givón (ed.) (1979) : 115-134.
- Lyons, John. (1968) *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge : Cambridge University Press.
- 森田勝之・吉田研作 (1985) 『スピードリーディング』東京 : 荒竹出版。
- Olshtain, Elite & Marianne Celce-Murcia. (2001) 'Discourse Analysis and Language Teaching.' Schiffrin *et al.* (eds.) (2001) : 707-724.
- Pinker, Steven. (1994) *The Language Instinct*. New York : HarperPerennial.
- Schiffrin, Deborah, Deborah Tannen & Heidi E. Hamilton, eds. (2001) *The Handbook of Discourse Analysis*. Malden, Massachusetts & Oxford : Blackwell.
- 白畑知彦 (編著)・若林茂則・須田孝司 (著) (2004) 『英語習得の「常識」「非常識」 - 第二言語習得研究からの検証』東京 : 大修館。
- 瀧澤正己 (2002) 「語学強化法としての通訳訓練

法とその応用例」『北陸大学紀要』26：63-72.

田中省作・富浦洋一 (2004) 「スラッシュ・リーディング支援システムの構築」『言語処理学会第10回年次大会併設ワークショップ「e-Learning における自然言語処理」』<http://lengua.cc.kyushu-u.ac.jp/english/sr/NLP->

WS-eLearning.pdf

Taylor, John R. (1995) *Linguistic Categorization : Prototypes in Linguistic Theory*. 2nd ed. Oxford : Oxford University Press.

米山達郎 (2005) 「スラッシュリーディングで速読力アップ！」『English Journal』2005年8月号：21-35.